

令和5年度 学校評価 成果と課題・対策

<生徒アンケートから>

- 概ね高く評価（3.2以上）している。
- ▲ その中で項目(1)に2点台も見られ、生徒自身も学力向上に課題意識をもっている。
 - 日々の授業改善に加え、タブレット端末等のICT機器の利活用、基礎基本の定着や家庭学習の習慣化を図る家庭学習の充実が必要である。
- ▲ 項目(2) ②は、前期から0.2以上低くなっている。
 - 毎月1回の生活アンケートを実施し、年2回の教育相談を行っている。教員だけでなく、相談員、スクール・カウンセラー、スクール・ソーシャルワーカーなどとも連携し、生徒・保護者の相談に応じている。複数担任制により更にきめ細かな相談機能の強化を図る。
- ▲ 項目(2) ③、(8) ②については、小中高一貫教育との関連が深い。
 - 総合的な学習の時間における「小値賀学」、更にはその学習成果を披露する学習発表会、模擬議会における質問・提言等、教育活動全体を通して、ふるさと小値賀に対する愛情や課題意識を育てている。小中高一貫教育をいかし、身近な高校生の存在を意識させることによって将来の目標の姿をイメージさせ、夢やあこがれ、志をもたせていきたい。
- ▲ 項目(10)の評価が低い。
 - 普段から学校教育目標や目指す生徒像を意識させる必要がある。折に触れて生徒に話したり、生徒会活動と連携したりして、意識の高揚を図る。

<保護者アンケートから>

- 全体的に前期評価の数値から上がり、高く評価していただいている。
- ▲ 評価(1)の家庭学習に関する数値が低い。
 - 家庭での自主学習としてレインボー・ノート（取り組んだ冊数が増えると、大学ノートの表紙の色が変わっていき、自分でもその成果を実感できる）を使用しているが、生徒によっては負担感、やらされ感があり、主体的学びにつながっていない。目標や見通しをもって学習に取り組めるよう事前の計画を促し、自己調整力を高めるとともに、一人一台端末のドリル等も活用して、自発的な家庭学習を定着させる。
- ▲ (3) ②、(6) ①、(10)では、生徒と保護者の認識に差がある。
 - 時間に対する意識や身の回りの整理整頓等の基本的な生活習慣の確立については、学校と家庭の連携が不可欠である。学校・家庭での情報交換・共有に力を入れるとともに、PTA活動の活性化を図る。

<学校関係者評価（学校運営協議会）から>

- ▲ 小中高一貫教育は、中学校が核となる事業だと思ふ。特に教科の流れや連携については主導的な役割をもって対応することが必要と感じる。その意識が弱い感じがするので頑張してほしい。コミュニティ・スクールの役割としては、学校の補完的なものではなく、地域がどういう子どもたちを育てたいかという意識の中で、地域でできること、文化や歴史の継承等に積極的に関わることだと思ふ。
 - 小学校と高校の間に位置する中学校として、その連携の中心になるべきという意識を更に高めていきたい。「地域の核となる学校」として、学校にとっても地域にとってもメリットのあるWin-Winの関係が持続可能な姿であると思ふ。

- ▲ 恥ずかしいのか、挨拶、会話、返事ができない子どもが少し多いかなと感じた。
 - コロナ禍によって、学校においても声を発することが制限された。アフターコロナとなった今、小値賀中の伝統である挨拶の良さを取り戻したいと、教職員と生徒会が一体となって取り組んでいる。
- ▲ 小中高一貫教育については、まだまだ発展途上の段階で改善の余地は大いにあると思う。教育委員会、教職員、保護者、地域の人たちと知恵を出し合い、少しずつ進化させていきたい。
 - 小中高一貫教育の発展は、子どもたちのためだけでなく、大人、地域のためでもあるという思いを町民の皆さんと分かち合いたい。
- ▲ 項目(1) ⑥に関しては、ICT 機器の活用ノウハウの積み重ね次第だと感じる。項目(8) ②、(10)に関しては、生徒が自分の客観的評価ができていないところに問題があるのではないかと。何か基準のようなものがあるとよいのだが。
 - ICT、特にタブレット端末の活用については、学習指導における喫緊の課題であり、研修を行っている。導入された当初に比べると、使用頻度が高くなってきており、日常的に使われるようになった。
自分の客観的評価は、「メタ認知」と言われる。これまでは、子どものメタ認知能力を高めるために教師の言葉掛け、働き掛けが重要であった。今後は、これを子ども同士の対話の中で高めていく必要がある。本校での研究課題に挙げている「自己調整力」は、このメタ認知能力を高めていくことによって獲得されると考える。
- ▲ 標準の半分以下の少人数学級の良さをいかした教科指導（わかる授業の創造）と一人一人に行き届いたきめ細かい生徒指導をこれからもお願いしたい。全ての子どもに基礎学力の保障と自己肯定感を。
 - 各学級15名以下の少人数であり、さらに数学、英語などの教科では複数によるTT（チーム・ティーチング）を行っている。さらに、複数担任制や通級指導教室の開設など、本校規模ならではのきめ細かな対応を模索していきたい。